

日本でのLGBTQ+に対する教育不足の原因は何か、  
それが原因で社会に広まっている間違っただ認識を減らすにはどうすればいいのか？

3年1組31番 南土居萌衣  
3年3組22番 清水ひよ莉

Keyword: 「多様な性」「学校」「保健」「教科書」

### 1. 研究の背景

私たちが普段生活している日常の中では、「多様な性」ということを考えた時に違和感を感じる場面が多くある。また、保健の教科書に「思春期になると異性を気にするようになる」という性的少数者を疎外するような表現があったり、体育の授業やトイレなど、体の性でどちらになるか決められてしまう制度があったりする。このような違和感がなくなるのは、日本では未だにLGBTQ+問題を重く受け止めておらず、LGBTQ+についての教育が多くの人に行き届いていないからである。そのため多くの人々がLGBTQ+のことをよく理解できておらず、彼らへの偏見や私たちが感じている多くの違和感が生じてしまう原因となっているのではないだろうか。

私たちが学校教育に焦点を当てた理由は、義務教育は全国民が受けるものでより多くの人に多様性に関する価値観を広めることができるからである。特に、幼少期にした経験はその人の人生を左右する。学校という集団行動を強いられる場では、周りの人との違いに気づく時期でもあるのではないかと。そこで、少数派を排除するような教育をしてしまうと、社会から隔離されて孤立してしまう人が、どれだけ幼くとも発生してしまうことになる。これでは、どれだけ家庭内で教育したとしても、周りに圧倒されてしまって意味が無い。そのため、学校で全体的に教育することが大切であると考えた。

### 2. 先行研究の検討

私たちが学校の授業で使用している保健の教科書には、「思春期には、男女とも異性への関心が高まってきます」(『現代高等保健体育』(大修館書店))と記載されている。この記述は男女間での恋愛のみを前提としていて、性的少数者に該当する人は排除されているように思える。このような内容の教科書だけを使って授業を進めると、生徒たちからすれば男女間での恋愛が一般的なものだという認識が浸透してしまい、性的少数者は例外だという扱いを受けることになる。

しかしこの根本的な原因を考えれば、授業を受けた生徒たちが悪いのではなく、十分な教育を義務化しない国に問題がある。つまり、日本の性教育は他国と比べて劣っており、それが原因で苦しむ性的少数者が後を絶たないのでは無いだろうか。

日本では偏見や間違っただ知識が多いが、医学的な分野へ目を向けてみると、性的少数者への人権保護を訴える声は年々高まってきている。名称の変更などをはじめ、少しずつではあるが、性的少数者が生きやすい世の中に変わってきているのではないだろうか。

### 3. 独自研究

2023年4月下旬に、弊校の第3学年138人を対象としたアンケート調査を行った。内容は、LGBTQ+についての知識やイメージについてのアンケートである。

まず、生徒のうち約7割は小中学校にてLGBTQ+に関する授業を受けている。また、本校でもLHRにて授業が行われているため、生徒たちはLGBTQ+に関する知識を得ているはずである。しかし、「分からない・知らない」「めずらしい」などの意見が合計約3割ほど見受けられた。さらに私たちは「どの科目でLGBTQ+について教えるべきか」というアンケートを実施した結果、最も意見が多かったのは保健体育で回答者の約6割を占めていた。

この結果を受けて私たちは現在の保健体育の教科書に代わる新しい保健の教科書の作成を行った。現在使用している保健体育の教科書の内容を再度見直したところ、「思春期の心と健康」についての説明文には成長と共に関心が高まる相手を「異性」とであると明言している。これでは異性愛が普通であると記載はされていなくとも、この文章には同性愛や無性愛は適応されない。私たちの求める教科書には、性別を決めつけるような言葉は出来るだけ排除し、どんなセクシュアリティを持つ人でも違和感なく受け入れられるものにしていきたいと考えている。そこで私たちは次のような文章を新しい教科書に載せることを提案する。

「思春期を迎えると、自分以外の人に対する関心が高まりやすくなります。関心が高まる相手は異性同性関係なく、人によってはそもそもこのような現象が起こらない場合もあります。また、性的な関心も同時に高まることが多いですが、これにも個人差があるため一概には言えません。しかし、このように関心が高まると相手とのコミュニケーションや人間関係が上手くいかなかったり、相手との意見の違いが顕著に現れやすくなります。このような事態を避けるため、お互いについての理解を深めることが大きな鍵となってきます。」

上記の文章は性別について明記しておらず、異性愛者と同性愛者のどちらから見ても受け入れやすい文章になっている。また必ずしも全員が思春期にこのような感情を抱くわけではないということを説明し、無性愛者の人も対象に入れている。

#### 4. 結論と今後の課題

LGBTQ+に対するイメージを調査するために日本労働組合総連合会が実施した会社でのアンケートや、今回研究を行う上で独自に実施したアンケートを通して、知識の普及が十分に出来ない現状を再確認することが出来た。やはり、現在行われている特別授業内での学習ではLGBTQ+に関する知識を入れ、理解を深めることは難しいのである。アンケート結果でも見て取れるように、保健体育などの通常授業での学習が求められる。現在の学習のままでは、社会で問題視されているような性的少数者への差別が無くなることもないだろう。

この問題を解決するために私たちが作成した教科書には、現在高校で使用されている教科書の異性愛を前提として記載されている説明文を全てどんなセクシュアリティを持つ人が見ても違和感や疎外感を感じず、生徒たちにも正しい知識を届けられるように改定した説明文が記載されている。私たちはこの教科書を『理想の教科書』とし、これを実際に保健体育の教科書として使用することで、LGBTQ+に対する差別や偏見が大いに減少すると考える。

今後の活動としては、今回の研究で作成した教科書をフリーペーパーとして配布し、実際に高校の保健体育の授業で使用できるような形にしたいと考えている。

#### 主な参考文献

橋本紀子・池谷壽夫・田代美江子『教科書にみる 世界の性教育』かもがわ出版, 2018  
『現代高等保健体育』(大修館書店)  
NHK science & culture journal